

トルコ大地震 風邪の訴え増

AMDA報告

トルコ東部の大地震で、国際医療NGO「AMDA」(岡山市)が派遣した医師が帰国し、1日、活動状況を報告した。寒さが厳しく、風邪などの対策も必要になっているという。

会見した神戸市の大類隼おおたぐみ



全身やけどを負った子どもを治療する大類隼医師(右)＝AMDA提供

人医師(呼吸器外科)は、福岡市の瀧崎祐一医師(神経内科)とともに地震から3日目の10月25日、被害の大きいエルジシュに入った。ビルが倒壊し、雪や冷たい雨が降る中、住民はテント生活を送っていたという。

2人は現地のNGOと協力し、患者48人の治療にあたった。縫合などが必要な外傷の患者は21人にのぼったが、時間とともにやけどが増加。狭いテント生活のため、煮炊きの際に使う火でやけどするケースが多いといい、風邪などを訴える人も増えたという。

大類医師は「今後は復興に向けた支援が必要になる」と話した。AMDAは約1カ月かけて被災地のニーズを調べ、次の支援を検討するという。